

ベトナム語母語話者のための日本語教育に関する総合的研究

論 文 要 旨

松田 真希子

1 論文の概要

本論文は、ベトナム語を母語とする日本語学習者の日本語教育に関する初の総合的な研究である。本論文では、ベトナム語母語話者は日本語を学ぶ際、文法、語彙、音声等のどの面で、そして初級～上級のどのレベルで習得上の問題があるかを検討した上で、ベトナム語母語話者の日本語教育にとって有益な教育方法、教育リソースを提案することを試みた。また、世界の日本語学習者の中で、ベトナム語を母語とする学習者は日本語の学びやすさの点で、どのような位置にあるのかも検討した。

2 論文の背景

日本語を学ぶベトナム語母語話者は学習地によって JSL（日本で他の母語話者と共に日本語を学ぶ）と JFL（ベトナムで日本語を学ぶ）に分けられる。筆者はいずれの学習者にも教授経験があり、それぞれへの関わりからベトナム語母語話者への日本語教育について問題意識を有するに至った。

JSL における問題意識は、ベトナム語母語話者には、同時期に日本語の学習を開始したにも関わらず、他の非漢字圏学習者から大きく遅れをとる学習者が多く存在することである。これは恐らく個人差よりも母語の異なりに起因している可能性がある。後者については、JSL の学習者よりもさらに時間的なコストがかかること、特に初級における学習所要時間が長いことを問題に感じていた。

ベトナム人、中国人、タイ人の日本語学習者に日本語学習に関するアンケート調査を実施した。その結果、ベトナム人は日本語の4技能の中で聴解を最も苦手としていることが明らかになった。その一方で日本語の発音はあまり難しくないと考えていることも明らかになった。また、日本語の文法は英語より難しいと感じていること、日本語の漢字は難しいと感じていることも明らかになった。恐らく聴取能力の低さはベトナム人日本語学習者の習得の遅れに大きく影響していると予想される。

筆者のように、某国の学習者は某国の学習者より日本語の覚えが遅い、といったことを経験的、印象的に把握している教師は多く存在する。しかし、どのような技能においてどの母語の干渉が強く働き、習得が容易になるのか、或いは困難になるのかということが、個人的な経験や印象に基づく知見のままでは、適切な教育が提供されることは難しい。様々なデータに基づいた検証を経て判断が下される必要がある。つまり、学習者に関する多様なデータに基づいた、日本語教育の総合的な研究が必要である。

このような問題意識は 1980 年代においては比較的明確に共有され、研究

も進んでいたようである。例えば、音声教育を例に挙げると、日本語学習者に対する母語別の対策は以前から検討されており、『日本語教育事典』には、英語、中国語等、母語の違いによるアクセントの指導上のポイントが部分的ではあるが紹介されている（日本語教育学会 1982）。しかし、その後は音声分析技術の発達により、それぞれの技能毎の研究が深化したことで、個々の現象や問題点を正しい手続きで実験し、確実に論証することに重点が置かれ、複数の母語を対象に学習者の発音の誤用と対策を検討するような言語横断的（縦断的）・総合的な研究は減少してしまったようである。

同時に、シャドーイングをはじめ母語の異なりに関わらない音声指導の研究が進んだこと（迫田 2004, 2005, 戸田 2007, 2008, 磯村 2009, 河野 2009 他）、母語転移では予測も説明もできない学習者独自の目標言語音声の産出ストラテジーや、日本人幼児による母語の獲得にも共通する音声習得の普遍的特徴が明らかになったこと（戸田 1994, 1996, 2003）で、音声教育において母語干渉の問題を追及すること自体が音声研究の主流からは若干遠ざかっているようである。

確かに母語の異なりに関わらない言語教育研究や学習ストラテジーの研究も重要である。しかし、母語の干渉が強い母語話者の習得の傾向を日本語教師が知識として持っていなければ、教師が判断と対応を誤ってしまう恐れがあるのではないだろうか。筆者はベトナム語母語話者の音声教育に関しては、少なからずその恐れがあると認識している。アンケート調査にもある通り、ベトナム語母語話者にとって日本語の音声の聞き取りは非常に難しい。同時に、ベトナム語母語話者はあまり問題視していないようだが、他の母語話者と比べ、発音上の不自然さも強い。そのため、ベトナム語母語話者の音声習得上の困難さとその対策については特に教師間での情報共有が求められる。

同様の傾向は日本語文法にも見られる。1980年代前半は寺村秀夫氏を中心とし、日本語教育の現場から生まれ、日本語教育の役に立つ日本語文法研究が志向されていた（庵 2011:2）。しかし、寺村の急逝（1990年）後、状況は変化し、日本語記述文法と日本語教育の関係が徐々に離れていく。庵(前掲)はその理由として日本語学の学問的成熟を挙げている。1980年代の命題、1990年代のモダリティの研究の発展を受けて、日本語学は記述的には洗練が進んだ。日本語学が母語話者の文法知識（文法能力 **grammatical competence**）の解明を目指すものということ自体は間違いではないが、そのことが自己目的化してしまい、学問のための学問になってしまったことで、日本語学の研究成果は日本語教育の現場で求められているものではなくなり、日本語学と日本語教育が次第に乖離してしまったと分析している。

文法教育に関しては 2000 年以降、この乖離を埋める動きが見られるよう

になる。野田(2001), 野田編(2005), 庵・森(2011)等により推進されている「日本語教育文法」という考え方である。「日本語教育文法」という考え方は寺村(1982)が過去において推進した日本語教育のための文法研究を復活・発展させた形といえる。これまでの日本語学で考えられてきた「結果として」日本語教育の役に立つ, という方向性から, 日本語教育では何が必要かを吟味した上で, それと対応するように文法記述を考える方向性の提唱である。

そのため, 音声教育に限らず, 文法研究, あるいは他の分野(文字語彙, 談話, 読解等)においても, 多様な母語話者(学習者)に応じた日本語教育を言語横断的・縦断的に研究し, 教育上必要な情報財を加工・提供することが非常に重要であると考え。つまり, 母語の異なりに対して, 包括的に習得の難度を検証したものや, 対策を具体的に示すような研究の提案である。そして, 音声・文法といった技能ごとの縦割りではなく, 技能を総合的に分析することで, 共通して見えてくる知見を得ることが重要である。

3 論文の目的

そこで本論文では 1980 年代において推進されていた日本語教育のための実用的な言語研究の再興を, ベトナム語をケースに実施すると同時に, 各技能における問題点を総合的に研究することで更なる学問的前進を目指す。これまで日本の高等教育機関で日本語教育を受ける学習者の中心は中国語, 韓国語母語話者であった。当面その傾向には変わりはないが, 近年, ベトナム, タイ, インドネシアなどの ASEAN 諸国の日本語学習者が増加傾向にある。また, 中国語母語話者, 英語母語話者, 韓国語母語話者のための日本語教育研究に比べ, ベトナム語, タイ語, インドネシア語といった東南アジア諸言語の習得研究や, それぞれの言語をトータルで見た場合の習得の困難度の比較研究というのはあまり見られない。そのため, 本研究では近年学習者数が急激に増加しているベトナム語母語話者を中心に, 可能な限り他のアジア言語やアジアの日本語学習者との対照研究を行うこととした。

次に, 母語話者別の日本語学習にかかる困難度を比較し, ベトナム語母語話者を中心に位置づけることを目的とした。英語母語話者が外国語学習を行う際の困難度や想定される学習時間の比較についてはいくつかの報告がある(千野 1999, The Foreign Service Institute of the Department (FSI)2007, Daily Infographic2011 他)。そして, 日本語は中国語, 韓国語と並び, マスターするのに最も難しい言語であり, 学習時間は 2200 時間かかるとされている。

しかし, 英語母語話者のための外国語学習想定時間表に対応するような表は日本語には存在しない。現状では, 経験則的にある程度の傾向を述べるこ

とは可能だが、データに基づいた信頼性のある回答が提示できていない状況である。

また、ベトナム語母語話者にとって日本語の学習は困難だろうか、それとも容易だろうか。また、他の母語話者と比べた際、中級、上級と熟達度が上がるためには、どの程度の学習時間や学習リソースが必要だろうか。

現在は第二言語習得研究も進み、母語の影響がしやすい部分と出にくい部分、影響がしやすい習得段階などについて研究されている。例えば母語の言語転移が起きやすい領域としては、発音、語彙、談話があり、文法の学習では転移の影響はあまり強くないことが報告されている(大関 2010:29)。また、母語の転移は初級の学習者ほど起こりやすいこと、学習者要因も習得に大きく影響しており、年齢、学習動機、リテラシーのレベルなどの個人差も習得に影響することが明らかになっている(大関 2010)。

そのため、単に目標言語と母語との関係性だけに着目するのではなく、最新の習得研究成果も踏まえながら、母語の異なりに応じた日本語教育のデザインを考えることを心がけた。

4 論文の構成と成果

本論文は大きく二つの分野に分かれる。一つ目はベトナム語母語話者の日本語教育のための教育方法に関する研究(2～4章)で、文法教育(2章)、文字・語彙教育(3章)、音声教育(4章)からなる。二つ目はベトナム語母語話者の日本語教育支援のための言語処理・教育工学的研究(5章)である。また、各章の概要と結果を以下に述べる。

第二章 ベトナム語母語話者の日本語教育のための文法研究

本章ではベトナム語母語話者の文法教育において問題となるケースを二件(名詞句習得とアスペクト習得)とりあげ、その原因と対応について日本語教育文法の枠組みで検証した。

第一節では名詞句の誤用の問題についてベトナム語母語話者の誤用の出現状況を他のアジア言語を母語とする学習者と比べた。その結果、ベトナム語母語話者は様々なタイプの名詞句の誤用が起こっていることを示した。これは漢語文化圏であること、非漢字圏であること、語構成法が日本語と異なること、「の」相当語の使用範囲が日本語より狭いことなどが要因として考えられる。また、誤用も含めた複合名詞句の産出量については、ベトナム語母語話者は中国、韓国、日本に次ぐ順にであった。これよりベトナム語母語話者については漢字文化圏の影響が見られることが示された。

次に日本語母語話者とベトナム語母語話者を対象にN1N2の正誤判定調査を行った。その結果、ベトナム語母語話者はレベルの上下を問わず「N1のN2」を「N1N2」とする誤用が見られる。しかし、習熟度があがるにつれ、その誤用は減少することが明らかになった。

第二節では否定の応答形式である「シテイナイ」がベトナム語母語話者に限らず他の母語話者でもほとんど使用されていない状況を明らかにし、初級の初期に導入する授業実験によって習得の促進を試みたが、うまくいかなかったことを報告した。

この二つの研究によって明らかになったことは、大きく二つある。

一つは言語間の近接性が低いため、ベトナム語母語話者にとって日本語の文法習得は容易ではないということである。そのことは日本語の名詞句の生成において他のアジア言語の母語話者と比べても多様な誤用が出現していることから明らかである。

もう一つは文法習得の問題は母語の問題以上に、日本語教育で提示されている日本語文法に問題があるということである。

そのため、学習者が理解しやすく、学習者にとって必要な日本語教育文法と文法教育のデザインを再検討する必要がある。NN複合名詞とNのN名詞句についても、ルールが提示されないままインプットに頼っているが故に誤用がいつまでも出現し、シテイナイについてもルールが明示的に示されていないがために、いつまでもシナカッタを用いることになる。こうしたことが解決されるための日本語教育文法研究が急がれる。

第三章 ベトナム語母語話者の日本語教育のための文字・語彙研究

本章では日本語とベトナム語の漢字語彙の異同と語彙・表記面での習得と教育方法について検討した。ベトナムは漢字文化圏に属する類縁語彙使用者（海保 2001）である。文字を持たないが、類縁の漢字語彙を持つベトナム語母語話者は母語の知識をどのように習得に活かしているのかを、対照研究や学習者コーパス研究を通じて、最適な文字・語彙教育の在り方について検討した。その結果、以下の成果が得られた。

1) 日本語とベトナム語は漢字音を媒介にし、語彙の共有が見られる。日本語能力試験出題基準内の二字漢字語を対象に調査した結果、一致又は類似している語は二字漢字語中では約 50%、出題語彙全体では約 25%であった。しかし一致語彙は中級後半～上級の書き言葉の語彙に集中しているため、初級ではその恩恵にほとんどあずかることができない。

2) 一対一の対応がある漢越語と漢語のリストを示し、どの程度記憶や既存の知識に頼って対応を復元させられるかをベトナム語母語話者と日本語母語話者、既習歴のあるベトナム語母語話者を対象に調査した。その結果、学習歴がない場合は、ベトナム語母語話者より日本語母語話者のほうが有意に良い成績となった。しかし最も成績が良かったのは初級後半のベトナム語母語話者であった。このことより、漢越音の知識を用いた漢字・語彙教育は初級前半ではなく、ある程度漢字の知識がある初級後半以降に導入すべきことを明らかにした。

3) ベトナム語母語話者の日本語における語彙使用の傾向を分析するため、中国、韓国、タイ、ベトナムの四カ国の日本語学習者の作文における語彙使用状況をテキストマイニングツールを用いて分析した。その結果、ベトナム語話者に類縁語使用者としての特徴が見られた。しかし日本語母語話者の作文と比べた場合は、語彙使用の傾向に大きな異なりが見られた、特に動詞（複合動詞（の使用の傾向））に差があった。また、対応分析を行ったところ、韓国語母語話者を除き、中国語、タイ語、ベトナム語話者は語彙の使用傾向に共通性が見られた。またコロケーションを見ても、「タバコを吸う」といった単純なコロケーションが多く、日本語母語話者の「副流煙を吸い込む」といった多様で複雑なコロケーションが出現していないことが明らかになった。

これらの成果より、漢越語の知識は日本語学習に有利に働くが、習得に有利に働くのは初級後半以降であること、ベトナム語母語話者に限らず他の母語話者も日本語の異なり語数より、コロケーションにバリエーションがないので、その能力を伸ばすための教育が必要であることを示した。

第五章 ベトナム語母語話者の日本語教育のための音声コミュニケーション研究

本章ではベトナム語母語話者のための音声教育の在り方について、産出面に焦点をあてて研究を行った。

ベトナム人の発音の不自然さには1) 単音レベルの異なり、2) 声調の干渉、3) 喉の緊張の干渉、4) 長さの対立の有無、等様々な要因がある。筆者は、自然さの妨げになっている主な要因は、高さ、リズムなどの韻律面での不自然さと、喉の緊張によるパラ言語的な聞きにくさ（＝苦しそうな印象を付与）であると考えている。本研究では、先行研究を踏まえながら、特にフィラーや言い直しなどの音声コミュニケーション上の問題点、母語話者の

聴覚印象について分析した。また、ベトナム語母語話者における日本語の発音熟達者の調査・分析から、ベトナム語母語話者のための音声教育の在り方について検討した。成果は以下のとおりである。

1) 日本語力が上級レベルのベトナム語、タイ語、中国語、韓国語母語話者が同一の日本語テキストを読み上げたものを日本語母語話者に評価させる聴覚印象実験を実施した。その結果、ベトナム語母語話者の日本語音声の産出は他の外国語話者（韓国語、中国語、タイ語）に比べ自然さも印象も最下位となった。特にアクセント、リズムなどの韻律面での評価が悪かった。これは母語の影響が考えられる。

2) 英語話者とベトナム語母語話者の自然発話（OPI）を比べた場合、フレーズの頻度には差がないが、言い直しの頻度に差が出ることが明らかになった（ベトナム語母語話者の方が多い）。これは母語の音節リズムとの関係が考えられる。

3) ベトナム人の発音熟達者調査を通じて、発音熟達者は高さに対する意識が強いことを明らかにした。また、発音の **Good learner** にはいろいろなケースがあるが、母語の干渉による不自然な発音を別の要素（談話展開等）でうまくごまかしているケースや、分析的に発音について考えながら自然な発音を身に付けたケースがあることを報告した。

第六章 ベトナム語母語話者の日本語教育のための言語処理研究

本章では、ベトナム人日本語学習者の言語支援ツールとして開発した日越機械翻訳システムと日本語学習 WEB 辞書について述べた。辞書については学習者辞書開発と工学辞書開発を行った。その後、そのツールについてのユーザビリティ評価結果について述べた。成果は以下のとおりである。

1) 日越対訳コーパスを約 5 万対開発し、統計的機械翻訳の手法で越日機械翻訳システムの開発を行った。その際、翻訳精度を高めるために、ベトナム語と日本語に共通する漢字を利用した。漢字と漢越音とのマッチング率を高めるために、日本語の文字列とベトナムの音節同士を対応づけて翻訳を実施した。その結果、精度は単語同士で対応づけた場合よりも高くなった。これは、小規模の対訳コーパスの場合は分割単位を小さくしたほうが精度が上がるという過去の研究成果を支持するものとなった。

- 2) 日本語—ベトナム語双方向の機械翻訳システムを開発し，一般テキストと科学技術テキストの場合での翻訳精度を比較した．その結果，どちらも最大 3 割程度の翻訳精度が達成できた．これは日英機械翻訳と同レベルである．今後コーパスサイズを増やすことで，さらに高精度の翻訳器が開発されうる．
- 3) オンライン日本語学習辞典 Chuta の WEB 辞書のベトナム語版をベトナムの大学の日本語教師と共同で開発し，機械翻訳と辞書のユーザビリティ調査を行った．その結果，機械翻訳は初級レベルの学習者に有効に利用できるが，中級～上級レベルの学習者にとっては，翻訳精度が低いため，オンライン辞書の方がニーズが高いことが明らかになった．

5 まとめと今後の課題

最終章（第六章）では，各章の成果をまとめると共に，他の母語話者との関係性の中で，ベトナム語母語話者がどの技能において，どのように習得が困難かについての基準を表した試案を示した．

具体的には，音声コミュニケーションに限定した場合は，ベトナム語母語話者は，習得が最も容易なグループ（中国語，韓国語母語話者）に入らないばかりか，タイ語話者など，最も日本語学習の習得に時間がかかるグループに属するということである．特に初級では音声面，文法面での異なりの問題から他の母語話者よりも習得に時間がかかると予想される．しかし，漢語の共有知識が活性化される中級以降では，読解力や作文力の伸びがモンゴル語や英語話者よりも早まる可能性がある．

そのため，読み書きも含めた場合は，平均的な学習能力のベトナム人日本語学習者であれば，日本語の習得に要する時間は初級 600 時間，中級 500 時間程度ではないだろうか．

しかし，まだデータに基づいて検討されていないことは数多く存在する．例えば，以下のようなことである．

- 日本語の聴取能力に関する縦断調査及び他の母語話者との比較調査
- （初級から中級），中級から上級にかけての習得の伸びに関する調査
- Good learner とそうでない学習者との習得の比較
- 母語干渉の表れやすい談話面での調査研究

そして、最終的なゴールの一つとしては、母語別の日本語習得の難度を一覧性のある形で提示し、母語の異なりに配慮した適切な教育デザインを提案することにある。本論文ではそのデザインの提案までには至らないが、その道筋をつけることを心がけた。こういった表がデータに基づいて作成され、習得困難度や想定される学習時間などが可視化されれば、現状の経験と勘に頼った日本語教育プログラムのデザインが妥当性のあるものに改善されるだろう。特に日本の大学のように、多様な母語の学習者が同じ教室で学ぶ場合には有効である。今後時間をかけて調査・研究したい。

また、2000年に入った頃からベトナムにおける日本語需要は急激に拡大し、2007年にはベトナムで日本語教育に関する大規模な国際シンポジウムも開催されている。中等教育での日本語教育も運営され、現在では他の東南アジア諸国に迫る勢いである。しかし、その一方で、韓国語や中国語もベトナムにおけるプレゼンスも急速に強めている。今後日本が教育、産業分野においてベトナムにおけるプレゼンスを高めるためには、良質な日本語教育の提供はもちろん重要だが、日本語に対する心理的・物理的な障壁を下げる方策が重要である

そのために必要なものの一つとして、より精度の高い日越オンライン辞書と機械翻訳システムの開発が挙げられる。日本語に対するアクセスが、日本語学習によってしか達成されないとすると、日本語に対する心理的な障壁は高いままである。日本文化や日本の社会経済に対しては、日本のPOPカルチャーや日系企業の進出により、心理的にも物理的にも身近になっている。このようなソフト面での親近性が保証されている状況で、もし日本語の情報を身近に得られる手立てができれば、さらに日本語にアクセスしようとするユーザー層が拡大するだろう。そして、そうしたユーザー層の拡大が進めば、いずれ、「より素早く信頼性の高い日本語情報を自力で入手したい、そのために日本語を学びたい」という動機につながるのではないだろうか。筆者は非母語話者が日本語によるコミュニケーションを行おうと思った時、日本語を学ぶということだけが解決策だとは思わない。常に学習を強いるのではなく、簡単に日本語での情報を読み取れるチャンネルを用意すべきである。日本語の情報にアクセスし、日本語および日本に対する親近感が高まれば高まるほど、日本語学習需要も上がると予想する。こうした日本語の言語障壁の緩和についても、ベトナム人のための日本語教育研究と同程度に重要だろう。

※参考文献は博士論文本体に掲載